



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	西ヨーロッパにおけるハプスブルク帝国史研究の近況
Author(s)	矢田, 俊隆; Yada, Toshitaka
Citation	スラヴ研究, 16, 251-270
Issue Date	1972
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5023
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112950.pdf



西ヨーロッパにおけるハプスブルク帝国史研究の近況

矢 田 俊 隆

- | | | | |
|-----|--------------|----|--------------------|
| I | 第一次世界大戦以前の状況 | V | イタリア・西ドイツ・オーストリアの事 |
| II | 第二次大戦後の一般的傾向 | | 情 |
| III | イギリスの事情 | VI | むすび |
| IV | フランスの事情 | | |

I 第一次世界大戦以前の状況

多民族国家ハプスブルク帝国の歴史、特に19世紀から20世紀にかけてのその衰退ないし崩壊の過程は、こんにちのわれわれにとってもはなはだ興味深く、かつ有意義なテーマであるが¹⁾、従来わが国ではこの分野の専門家が皆無に近い状態であった関係から、日本で今後研究を発展させてゆくためには、従来海外でどのように研究が進められてきたか、現在どんな点が主要な問題になっているかを確かめる作業が、まず必要になる。海外のハプスブルク帝国史研究は、一応地域別に1) アメリカ合衆国、2) 西ヨーロッパ、3) 東欧共産圏の三つに区分することができる。そのうち1) についてはすでに数年前本誌で取り上げたので、ここでは2) を考察の対象にし²⁾、3) は別の機会に譲ることとする。

歴史叙述は政治的関心に導かれることが多いが、西ヨーロッパのハプスブルク帝国史研究においては、特にこの点が顕著であったことを認めざるをえない。本稿が主として取り扱うのは、1945年以後の時期であるが、この点を明らかにするために、しばらく第一次世界大戦以前の時期に目を向けたい。

第一次大戦前には、フランスやイギリス——とりわけ後者——では、人々はドナウ地域の土地や人間について正確な知識をもっていなかった。ハプスブルク帝国は、彼らにはきわめて関係のうすい国であり、その経済や貿易は彼らにとってなら競争を意味しなかったから、彼らの関心をほとんどひかなかったのである。19世紀の間は、彼らは、ドナウ地域の権力複合体であるハプスブルク帝国を、東のロシア、西のドイツに対する防壁とみなし、ヨーロッパ国家世界に勢力均衡を保持する上の重要な要素とみたために、これを破壊しようと考えたものはほとんどなかった。

しかし、やがてこの見解は疑われはじめた。ドイツ帝国が世界政策に邁進しはじめたことによって、ヨーロッパにはきびしい緊張関係が生まれ、それが西欧諸国の利害を脅かすに至ると、独逸同盟を通じてドイツと密接に結びつけられたドナウ帝国は、否応なしにこ

1) ハプスブルク帝国史研究の現代的意義については、最後の「むすび」の項参照。

2) 本稿は、1966年にアメリカ合衆国のインディアナ大学で催された「19世紀のハプスブルク帝国における民族問題」にかんする国際研究集会で Fritz Fellner 教授の行なった報告、さらに Hugo Hantsch, “Geschichte Österreichs in der neuesten englischen, französischen und amerikanischen Forschung”, Donauraum, 1970; Austrian History Yearbook の後述の Tapié をはじめ数々のビブリオグラフィックな論文、その他諸雑誌の書評などに負うところが多い。

の関係に巻きこまれ、イギリスとフランスの不信を招かざるをえなくなった。特に、三国協定の成立によってロシアが西欧諸国の勢力範囲に加えられ、ハプスブルク帝国がボスニア・ヘルツェゴヴィナ両州を併合して以後は、英仏両国はハプスブルク帝国をドイツの衛星国ないしドイツ帝国主義の近東に至る掛け橋とみるようになり、この見解が第一次大戦中オーストリア-ハンガリー帝国に向けられた宣伝の中心にすえられたことは、周知のとおりである。他方ハプスブルク帝国内諸民族の自主独立運動の発展は、オーストリアの歴史を崩壊すべく運命づけられたものとみる見方を促進し、諸民族の民族的自覚は、対ドイツ戦争の重要な道具になったのである。

このような事情を背景に、自由=民主主義的なイデオロギー論が力を得た。すなわち、ハプスブルク帝国は古くさい、時代おくれの存在であり、諸民族の自由をめざす運動にとっての障害であり、ヨーロッパを民族的・民主的基礎にもとづいて再構成する上の妨げであるとする見方が、登場したのである。当時英仏では、ハプスブルク帝国の民族問題について幾多のすぐれた著作が専門家の手で書かれたが、いずれも上記のような政治的関心から生じたものであって、純粋な学問的所産とはいいがたかった。フランスの Louis Eisenmann, Ernest Denis, A. Chéradame, L. Léger, イギリスの Lewis Namier, Henry Wickham Steed, Robert William Seton-Watson たちの書物がそれであって、上述の理念はこれらの書物を通じて広く拡がり、世論に強い影響を与えたのである。

L. Eisenmann, *Le compromis austro-hongrois de 1867. Étude sur le dualisme*, Paris 1904.

E. Denis, *La Bohême depuis la Montagne-Blanche*, 2 vols., Paris 1903.

A. Chéradame, *L'Europe et la question d'Autriche au seuil du XX^e siècle*, Paris 1901.

L. Léger, *Histoire de l'Autriche-Hongrie depuis les origines jusqu'à l'année 1894/5*, Paris 1907.

L. Léger, *Prague, ville d'art*, Paris 1907.

H. W. Steed, *The Hapsburg Monarchy*, London 1913.

H. W. Steed, *Through thirty years 1892-1922*, New York 1924.

R. W. Seton-Watson, *The future of Austria-Hungary and the Great Powers*, London 1907.³⁾

R. W. Seton-Watson, *Racial Problems in Hungary*, London 1908.

R. W. Seton-Watson, *The Southern Slav Question and the Habsburg Monarchy*, London 1911.⁴⁾

これと並んで、ハプスブルク帝国の解消はヨーロッパにとって不幸であり、ドイツとロシアの権力欲に制限を設けるために多民族国家を無傷のまま維持しなければならぬとする意見もなお存在したが、なんといっても当時は、ウィーン政府がドイツの要求に従属している点を強調し、ハプスブルク帝国内のスラヴ系諸民族を援助し、その解放闘争を支持すること

3) Scotus Viator という仮名で出版され、E. Brockhausen の手でドイツ語に翻訳された。Die Zukunft Österreich-Ungarns und die Haltung der Grossmächte, Wien 1908.

4) 翻訳は Die südslawische Frage im Habsburgerreich, Berlin 1913.

西ヨーロッパにおけるハプスブルク帝国史研究の近況

が得策であるとする議論の方が、優勢であった。いずれにせよ、当時のハプスブルク帝国史にかんする叙述がはなはだ論争的なものであったことは、特徴的である。そして、このような見解のある部分がある後ながく影響をもち続けたことは、のちにみるとおりである。

ところで、1918年にハプスブルク帝国が消滅するとともに、旧帝国の歴史に対する英仏両国の関心もまた消失してしまった。それでもなお少数の書物は書かれたが、まったく例外的なものにすぎなかった。そこでわれわれはひとまず两大戦間の時期をこえて、当面の第二次世界大戦後の時期に目を向けることにしたい。

II 第二次大戦後の一般的傾向

第二次大戦後の時期には、西ヨーロッパ特にイギリスとフランスの歴史家の間では、ハプスブルク帝国の歴史は好まれたテーマではなく、むしろ中欧の諸問題に対する関心の欠如が、著しい特色をなしている。終戦直後、ヨーロッパの知識人は彼ら自身の過去の再評価に没頭し、他の歴史研究に時間とエネルギーをさく余裕はほとんどなかった。フランス人は第三共和制とヴィシー政府に目を向け、イタリア人はファシストの時期もしくはレジスタンス運動に研究を集中し、イギリス人は地方史に専心して、かつての光栄ある時代を忘れようとし、ドイツ人は、彼ら自身の過去から現在の自己を説明すると同時に、自己を解放しようとしたのである。

ところが1940年代の末になって、東ヨーロッパにかんする研究がにわかにかんになり、ヨーロッパ各地に東欧研究所が相次いで設けられ、ロシアおよび東欧の問題が歴史の研究と出版を支配しはじめた。この傾向はまずイギリスで始まったが、その際スラヴ研究学派 School of Slavonic Studies の人々は、旧ハプスブルク帝国地域（いわゆる中欧）の諸民族の研究よりも、ロシアと東欧の問題により多く注意を向け⁵⁾、しかも東欧の歴史は、主として共産主義の成功という見地から取り扱われたのである。さらに、第二次大戦後ヨーロッパが鉄のカーテンで東西に分割されたことは、歴史研究特に中欧の諸問題にかんする研究の上に、悲惨なそして有害な影響を及ぼした。かたく仕切られた境界線のために、歴史家はそれを越えたかなたの同僚たちとコミュニケーションすることを妨げられたばかりでなく、イデオロギーの相違から、まったくちがった種類の研究テーマを選ばざるをえなかった。西方の歴史家が主として議会の歴史や外交政策に注意を集中したのに対して、東欧の歴史家は民族問題の社会的・経済的側面に主力を注いだ。歴史家が両陣営に分割されたために、中欧が一つの歴史的単位としての意味を失うようになったことは、特に注目される必要がある。たとえば、東・西の学者はともに、かつてのドイツないしハプスブルク家の支配がチェコスロヴァキアないしベーメンの歴史に及ぼした影響を研究することにもはや興味を失い、チェコスロヴァキアとロシアの間に存在する関係の発見に、関心を向けたのである。

中欧の統一が破壊された結果、一つの単位としての中欧の研究に向かった歴史家はごく限られたが、著しいのはオーストリアの学者の活動である。オーストリア人は、1938年までは彼ら自身の歴史をドイツ世界の歴史の一部と考えていたが、いまやそれを、世界史

5) もっとも Hugh Seton-Watson のように、東・中欧を全体として取り扱った学者もすこしはあった。
H. Seton-Watson, *Eastern Europe between the Wars, 1918-1941*, Cambridge 1945.

の中の一つの特殊な連続的要素とみなしはじめ、1945年以後は、19世紀のオーストリア史研究の大部分は、オーストリアの歴史学者によって行なわれた。

ところが1950年代初期になって、一般に西欧の学者はふたたびオーストリア史について有意義な研究を行ないはじめたが⁶⁾、その際アプローチの仕方に重大な変化がみられる。1914年以前および両大戦間の時期には、ハプスブルク帝国の諸問題について筆を取った西欧の学者たちは、主に帝国内の遠心的な諸要素に関心をもっていたが、1950年代になってはじめて、彼らはハプスブルク帝国の民族問題その他を、全体国家 Gesamtstaat の観点から研究するようになったのである。

1950年代にオーストリア史の全体国家的解釈が顕著になった一つの理由としては、もしハプスブルク帝国が破壊されなかったとしたら、第二次世界大戦はさけられたかもしれないという感情が、当時かなり広範に支配していたことを、あげなくてはならない。この気持を端的に表現しているのは、「サン＝ジェルマン条約およびトリアノン条約によるオーストリア-ハンガリー帝国の完全な破壊は、第一次大戦後の根本的な悲劇であった」というチャーチルの言葉である⁷⁾。全体国家的アプローチが有力になったいま一つの実際的な理由は、1940年代末から1950年代にかけて西方の学者が利用できた唯一の史料は、ウィーンの中央公文書保管所 (Zentralarchiv) に収められた記録だったことである。他の継承諸国の文書室は、共産圏に含まれて西欧やアメリカ合衆国の学者には近づきがたかったために、彼らはもっぱらウィーンへ研究にやってきたが、そこに見出されたのは、ウィーン政府の中央集権主義的見地を反映する史料であったから、いきおいこのような視点が彼らの著作にも反映したのである。

III イギリスの事情

以上1945年以後の西ヨーロッパの一般的傾向をみてきたが、次に各国別の特殊な状況をやや詳しく考察することにする。

まずイギリスから始めよう。イギリス人は一貫して中欧の歴史にはほとんど関心をもたなかった、といってよい。すでにみたように、第一次大戦前イギリスの歴史家がオーストリア史を取り扱うことは、非常に少なかったが、しかしそれを取り扱う場合には、イギリスに深く根ざした伝統的観念に支配された。イギリス人は、自己の人生観にとって無意味な理解しがたい状態や出来事を眺める場合には、伝統的観念をよりどころにしがちであるが、この場合にも彼らは、自国の自由主義的・民族的な考え方、とりわけ議会制民主主義の立場から、オーストリアの歴史を、自由をもとめる民族的・社会的な運動と保守反動的諸要素との戦いの舞台とみ、時代おくれの王朝的国家政策と近代的な政治的意志形成との対決の場であり、相容れぬ対立状態にある支配民族と従属民族との間の権力闘争であると判断した。オーストリア-ハンガリーを存続させるかどうかという問題では、イギリスの政策はつねに自国の権力利害に導かれたが、決定的な役割をはたしたのは、列強の帝国主義競争から生じた世界政策的全体状況であった。オーストリア-ハンガリーは世界的強国で

6) オーストリア史に対するアメリカ人の関心も、ほぼ同じ時期にはじまっている。

7) Winston S. Churchill, *The Second World War*, 6 vols., Boston 1948-53, Vol. I, p. 10.

はなく、海軍国イギリスの地位を傷つけるおそれもなかったが、同盟関係に由来するある種の緊張が、ドナウ王国にかんするイギリス史家の判断に本質的な影響を及ぼした。元来純大陸的な考え方に立っていた独逸同盟は、近東がドイツの政策の視野にはいったとき、イギリスにとって別の意味をもつに至り、イギリス人はハプスブルク帝国をドイツの近東進出の露払いとみなし、しだいに大きな不信の目で眺めはじめた。そのためバルカン諸国は、ドイツ帝国主義に対する防壁の機能を負わされ、従来英・獨両国の政策はロシアの地中海進出に対抗して一致した方向を示していたのに、1908年のオーストリアによるボヘン州併合以来、イギリスにとって、ロシアはむしろバルカンの防壁建設のための歓迎すべき協力者と考えられるようになった。これと関連して、イギリス人の歴史的関心は、バルカン諸民族にとどまらず、ハプスブルク帝国内の南スラヴ諸民族にも向けられ、彼らのナショナリズムを支持する気持が、一般に広まったのである。

当時書かれた H. W. Steed, R. W. Seton-Watson, Ronald Burrows らの論文は、こうした政治的傾向の強い影響を受け、かなりジャーナリスティックな性格をおびている。しかし彼らも、第一次大戦までは、もしハプスブルク帝国が連邦主義的に改造されるなら、それは存続してもさしつかえないし、それどころか、勢力均衡の観点からこの国家の解消は望ましくないと考えていた。ところが、戦争中イギリスに亡命したマサリクおよび彼の指導下にロンドンの King's College に設けられた School of Slavonic Studies の影響をこうむって、イギリス人の考え方は次第に硬化してきた。当時外務省の東欧課を指導していたポーランド出身の歴史家 Lewis Namier は、ゲルマン民族とスラヴ民族とは相容れない対立状態にあり、中欧におけるドイツの覇権を打破するためにはスラヴ人の民族運動を支持する必要がある、これらの運動を妨げているハプスブルク帝国の解体もまた不可欠である、という見解に立っていた。そこには、建設的な „Mitteleuropa” の概念の入りこむ余地はなかった。戦争宣伝の進行とともに、人々はオーストリアの歴史をスラヴ人亡命者の目で眺めるようになったが、そのスラヴ人亡命者たちは、圧制的なハプスブルク家の支配をはげしく攻撃するとともに、指導的民族であるドイツ人とマジャール人を排斥し、ドナウ帝国の破壊は文明とヒューマニティーの要求であると主張したのである⁸⁾。亡命者のこのような告発は、歴史的知識をほとんどもたない政治家たちに、道徳的な戦争指導の有効な武器を提供した。

以上みてきた第一次大戦以前のイギリスの特徴を簡単にまとめるならば、それは、1) ハプスブルク帝国についての否定的見解が支配したこと、2) 研究の面では、イギリスの学者は全体としてのハプスブルク帝国にはさしたる関心がなく、R. W. Seton-Watson にみられるように、主としてスラヴ問題に関心をよせたこと、の二点に帰着する。やがてハプスブルク帝国が消滅したとき、旧帝国の歴史に対するイギリス人の関心は、完全に失われ、両大戦間の時期に中欧の歴史について書いているのは、Carlile A. Macartney⁹⁾

8) Steed, Seton-Watson および Burrows は、1916年に、チェコ亡命家のメガホンともいうべき „New Europe” 誌を創刊した。

9) この時期の彼の書物には、次のものがある。The Social Revolution in Austria, Cambridge 1926; National States and National Minorities, London 1934; Hungary and Her Successors: the Treaty of Trianon and its Consequences, 1919-1937, London 1937.

など数人の学者にすぎないが、上記の二つの特徴は、その後ながくイギリスの研究につきまとうことになった。そこで、この二点を中心に、以下第二次大戦後の時期をみてゆくことにする。

イギリス人が中欧の歴史にほとんど関心をもたない点は、第二次大戦後も変わっていない。最近十年間にイギリスで出版された中欧史にかんする重要な研究は、いずれも移住者——Zbyněk A. B. Zeman, Harry Hanak, Peter G. T. Pulzer など——の手になるものである。

Z. A. B. Zeman, *The Break-up of the Habsburg Empire, 1914-1918*, London 1961.

H. Hanak, *Great Britain and Austria-Hungary during the First World War. A Study in the Formation of Public Opinion*, London 1962.

P. G. T. Pulzer, *The Rise of Political Anti-Semitism in Germany and Austria*, New York 1964.

もっとも、少数ながら本来のイギリス人学者による研究もないわけではないが、そこには上記の第二の特徴がみられる。かつてイギリスの学者が主要な関心を示したスラヴ問題の研究は、1945年後は、鉄のカーテンの背後の非ドイツ系継承国家で仕事をするのが困難になったために、続行できなくなったが、こうしたハンディキャップにもかかわらず、現在までイギリスの学者によって出版された研究は、全体としてのハプスブルク帝国よりもその個々の部分を扱うといった傾向を示している。Macartney のハンガリーにかんする数々の書物、Hugh Seton-Watson の東・中欧にかんする仕事などは、その例である¹⁰⁾。

C. A. Macartney, *A History of Hungary, 1920-1945*, 2 vols., New York 1956-57.

C. A. Macartney, *Hungary. A Short History*, Edinburgh 1962.

H. Seton-Watson, *The East European Revolution*, London 1961.

次に第一の点を取りあげよう。第一次大戦中にハプスブルク帝国に対する否定的宣伝が植えつけた印象は、その後ながく一般人の意識の中につきまとうことになった。たとえば1941年に公刊された

Alan T. P. Taylor, *The Habsburg Monarchy 1815-1918*, London 1941.

は、L. Namier に捧げられていることから知られるように、こうした流れをくんだ、ハプスブルク帝国に好意的とはいえない挑発的な書物であるが、改訂新版という形で1966年までに四回出版され¹¹⁾、広範な読者層を獲得している。

しかし最近になって、この傾向に対する批判的見解が現われはじめたことが、注目される。その一つとして、まず

Edward Crankshaw, *The fall of the House of Habsburg*, London 1963.

を取りあげよう。彼によれば、ハプスブルク帝国はイギリスの歴史家たちから親切な取扱いをうけてこなかった。帝国内の諸民族にはありあまるほどの同情がよせられているが、危険な世界の中でそれら諸民族をまとめておこうとした帝国の支配者たちには、ほとんど

10) A. J. P. Taylor も、ハプスブルク帝国を、さまざまな地方がそれぞれの伝統的な国家の権利を保持している多民族国家として、捉えている。Austrian History Yearbook, Vol. III, pt. 3, 1967, p. 300 参照。

11) 1948年以後は *The Habsburg Monarchy 1809-1918* となる。

同情がよせられていない。しかしハプスブルク帝国が解決しようとした諸問題は、この国家の消滅後もなお存続しているのであって、われわれはこんにちそれらの問題とかかわらねばならない。こうして彼は、忘れ去られたハプスブルク帝国をもう一度同情の眼をもって眺め、深く理解する必要のあることを指摘する。彼はジャーナリスト出身で、自分をアマチュアにすぎないと謙遜しているだけあって、その学識は本書の諸命題に十分な説得力を与えているとはいいがたいが、イギリスでは従来みられなかったほどオーストリアの歴史叙述にも考慮を払っており、新しい方向を勇敢に開拓して、Taylor 風の主観的叙述がながく保持してきた独占的地位をゆるがした点は、評価しなければならない。なお彼の主張の背後には、ヨーロッパ統合のための努力という最近の動向があり、これとの関連で問題提起が行なわれていることは、興味深い。

次にあげる必要があるのは Gordon Brook-Shepherd で、彼は“Österreichische Odyssee,” „Engelbert Dollfuss,” „Der Anschluss”

など多くの書物を書いているが、特に有名なのは、近業

G. Brook-Shepherd, *Um Krone und Reich. Die Tragödie des letzten Habsburgerkaisers*, Wien 1968.

である。彼はイギリスの高等兵站本部の陸軍中佐としてウィーンにいた人物で、ウィーン的女性を妻とし、12年間ウィーンで *Daily Telegraph* の通信員をやり、最後にはロンドンの *Sunday Telegraph* の編集長代理をつとめた。彼の書物はすべて独訳されているが、学問的に十分整ったものではなく、ジャーナリスト的要素が混入している。しかし彼は歴史家としての訓練をつんだ人物で、彼の書物が学問的な装いをもたない点は、広い読者層を対象にして興味深く語らねばならなかった事情から説明できよう。彼は冷静な観察者であるばかりでなく、帝国の運命をある程度みずからとも体験したために、彼の書物には随所に、偉大な過去をもちながら悲惨な終末をとげた帝国への同情が感知される。そして彼は少なからぬ勇気をふるって、イギリスでながく行なわれてきた古いステロ版の見解を一掃しようとしている。

最後にオックスフォードの C. A. Macartney 教授の近業

C. A. Macartney, *The Habsburg Empire 1790-1918*, London 1969.

をあげなくてはならない。これはスケールの大きな著作で、学問的価値もきわめて高い。本書の叙述も、ハプスブルク帝国の歴史を何よりもまず諸民族の側から考察し、支配する王家の側からみていないという、イギリス史学の共通点を備えており、外交上の諸事件にも比較的スペースが割かれていない。彼がここで特に力をいれているのは、ハンガリーの歴史であるが、このことは、彼が第一次大戦後ブダペストでイギリス副領事をつとめ、マジャール語を理解する数少ないイギリス人の一人である——しかしスラヴ系の言葉は理解しない——ことと関係がある。いずれにしても、定評ある専門史家 Macartney の叙述は特別の重味をもっている。

彼は、イギリス下院議員 Grant Duff が1869年に行なった演説から「政治家たちはそもそもオーストリア帝国の内外の何を知っているのか。それには独特の学問が、それどころか半ダースもの学問が必要なのだ」という一節を引いて、これを本書の基調にしてい

る。すなわち著者は、ハプスブルク帝国の複雑な問題点を理解し判断することが、とりわけ外国人にとっていかに困難であるか、さらに、事態を単純化し先入見に捉われた表面的判断を下すだけではいかに不十分であるかを、はっきりと指摘する。彼によれば、歴史と民族的・社会的重層性とによって作り出されたオーストリア-ハンガリーの特殊な状況とその諸困難は、他のまとまった民族国家のそれとはほとんど比較を絶している。それゆえ彼は、決定的な判断を下すにあたって非常に慎重であり、さまざまな見解を好んで重視するが、継承国家の文献についての広範な知識が、その際大いに役立っている。しかし何よりも注目されるのは、彼がドイツの要素の意義を過小評価し、ハンガリーを特に詳しく取り扱っていることであるが、モハーチの戦いののちフェルディナント一世がヤゲロ王朝の遺産を継承した時（1526）から1918年のドナウ王国の最後の日々に至るまで、ハプスブルク帝国の運命がハンガリーに強く依存したことを思えば、著者の意図は理解にかたくな。彼はまた、帝国内部の諸対立や遠心的な運動ばかりでなく、第一次大戦中の戦争政策上の動機や力が帝国の没落を本質的に促進したことを認め、それらの混合を区別することはむずかしいと述べている。たしかにハプスブルク帝国の解体は、連合側のかかげた一般的原则——民族自決など——の名において、また一つには、戦争中に軍事的考慮から列強間に結ばれた諸条約を実現するためになされたのであって、列強の手で諸民族の望んだ以上のことが行なわれたとみられる節がないわけではない。彼の叙述もある種の歪みを免れてはいないが、公正であろうとしていることは事実であり、ながく尾をひいていた怨恨や敵意や意識の歪曲、また非科学的な知ったかぶりなどから解放されていることは、明らかである。

Macartney の本書はよい意味での編集物というべきものであるが、ハプスブルク帝国にかんする個別研究は、イギリスでは皆無に近い状態である。

IV フランスの事情

次にフランスに目を移そう。その際まず気がつくのは、第二次大戦後フランス人がイギリス人以上にハプスブルク帝国に無関心だったことである。Victor Tapié は *Austrian History Yearbook* に、中欧史にかんするフランス人の研究のビブリオグラフィーを発表しているが¹²⁾、これをみれば、フランスで行なわれてきた研究がいかに乏しいかを、はっきり知ることができる。戦後フランス人が主としてかかわってきたのは、マリア=テレジア、フランツ=ヨーゼフ、皇太子ルドルフといった、すでに多くの書物が書かれている人物についての学問的というよりはむしろ通俗的な伝記の研究であるが、特記するまでもない。

しかし最近10～15年の間に、従来とはまったくちがった新しいハプスブルク帝国史の研究成果が現われはじめた。それは、1) 第一次大戦前夜の Denis, Chéradame Léger などにみられるような政治的・イデオロギー的視点に立った歴史叙述ではなく、純粋に科学的な、史料にもとづく実証的研究であって、かつてのものに付随していた論争的性格を失っている点が、特徴的である。またその際、2) 科学的関心と並んで全ヨーロッパ的な

12) Victor L. Tapié, "Recent French Publications on the Habsburg Empire and the Succession States (1952-1962)," *Austrian History Yearbook*, Vol. I, 1965, pp. 164-170.

考え方が決定的役割をはたしていることも、注目に値する。さらに、3) ハプスブルク帝国の問題点の取りあげ方もかなり広範囲に及び、特に経済的・社会的な性質のテーマをも取り扱っている点が、まことに興味深い。これらは、ハプスブルク帝国史の研究でながい間閑却されていた方面であるが、歴史的経過をいっそう深く把握するためには、不可欠のものである¹³⁾。

ここでは、中欧の諸問題への関心を持ち続けようと努力してきた二人の学者を中心に、考察を進めよう。その一人はソルボンヌの Victor L. Tapié 教授で、彼の本来の研究領域は 17～18 世紀のフランス史、特に三十年戦争とリシュリューの時代であるが、歴史的経過は精神的なものに充たされるという観点から、芸術とある時代の精神構造との間の内的関連を強調し、バロック時代のベーメン史について貴重な仕事をしてきた学者である。彼の著書には

L' Europe Centrale de 1598 à 1660.

L' Europe Centrale au début du XVII^e siècle 1598-1618.

Les relations entre la France et l' Europe Centrale de 1661 à 1715

L' Europe Centrale et Orientale de 1689 à 1796.

などがあるが、ここで取りあげるのは、オーストリア史にかんする教授の次の近業である。

Victor L. Tapié, Monarchie et peuple du Danube, Paris 1969.

本書は、ローマ時代から第二次大戦に至るまでのドナウ地方の発展の跡をたどった膨大な著作であるが、重点はオーストリア-ハンガリー帝国の時代におかれている。彼はプラハにかなりながく滞在して、この町をよく知っており、またチェコ語を理解するところから、自然チェコ=ベーメンの歴史に力をいれる結果になっている。また最近の活発なチェコの歴史叙述からも、チェコ民族の政治的・精神的・文化的基礎を知るための多くの材料を入手し、マサリクを高く評価し、その人道主義的なエトスに信頼をおいている。本書で彼は、ハプスブルク帝国史の中で人心を強くとらえる一般的な問題、すなわち君主国的・王朝的伝統と帝国の枠内で共存した諸民族の生活条件との関係を、冷静に考察しながら正しく評価しようと努めている。彼によれば、第一次大戦までは何人もハプスブルク帝国の存続を疑わなかったし、この国家の存続は、まさに連邦主義的・民主的再編成という意味での国家組織の全般的改革に依存していた。彼はチェコ民族の国法的要望に十分な理解をもち、チェコ民族の友人であると自認しながらも、オーストリアに対する深い同情の気持ちを隠さない。オーストリアは、多くの民族に避難所を提供し、彼らの独自の民族生活の維持と、その有益な文化的発展の上に、疑う余地のない役割をはたしたからである。彼は、民族的自覚が目ざめ強化されてゆく状態と、自主的組織への強い衝動とを、事実在即して

13) 周知のように、戦後フランスでは、「アナル」Annales 誌に拠る社会経済史学派が、歴史研究の新しいアプローチを提起した。彼らは、事件的政治史をたんなる「表面的現象」を叙述するにすぎないものとし、「長期の継続」を事件史の急速な変化に対立させ、歴史的連関の「深い」把握を主張するが、その際特に社会的・経済的生活過程を決定的な意味をもつものと考えている。「アナル」派の展開した経済的、社会学的、統計学的方法は、民族問題の研究に適用されればはなはだ有益であり、この複雑な問題の理解を深め、ハプスブルク帝国史についての論議を大いに刺激するものと思われる。しかしこの方法は、この分野にはまだ一部取り入れられたところで、むしろ今後に期待がかけられる。

跡づけているが、彼によれば、この衝動はまず王国の枠内で、かつその存立の基礎を危くすることなしに、実現されるはずであった。戦争の経過の中ではじめて、亡命者たちの活発な宣伝が、連合諸国に支持されて、分離主義運動を戦争目的の中に組み入れ、同時にこの運動に現実的な政治権力の基礎を与えたのであって、この運動のかかげる諸要求は、1919～20年の講和条約締結の際にはじめて正式に認められたのである。

彼は連邦主義的改革の可能性を頭におきながら、アウスグライヒに由来する二重主義的国家体制とそれへの固執を批判し、対比的に皇太子フランツ＝フェルディナントの人柄とその大オーストリア計画を評価する¹⁴⁾。なおプラハとウィーンは、彼によれば、王国の運命が完成される二つの要点であって、ベームンの首都プラハは、西欧文化圏の成果を最も多く身につけてハプスブルク帝国のスラヴ人世界で指導的役割を与えられている自覚的民族の国民的な努力の場であり、ウィーンはコスモポリタンな首都で、創造的な文化の光をあらゆる方面に放射し、非ドイツ系諸民族にも影響を及ぼしている。オーストリア＝バロックおよびマリア＝テレジアにかんする章は、全巻中最も美しくかつ感銘深い箇所である。

Tapié は本書の意図を次のように述べている。ハプスブルク帝国の現実、明確で筋の通った概念から出発する西欧人を戸惑いさせたが、この歴史の矛盾を解こうとしたとき、彼らはいかに、ハプスブルク王家と諸民族の間の不断の闘争にすべてを還元しようと考へ、イデオロギー的傾向に従って諸党派の一つを支持した。しかし最近の歴史学の発展によって、はるかに幅の広い公平な考察の仕方が可能になってきた。固有のニュアンスを帯びながら共通の特色をも備えた文明を、経済的・社会的な視点から分析することによって、われわれは、遠心的な力と求心的な力がぶつかりあう不安定さのうちに4世紀も続くことができた均衡の基礎を、よりよく認識することができるのである、と。

Tapié のもとには、これに関係する諸問題を研究している何人かの学者がいることを、つけ加えておこう。

いま一人は、ソルボンヌの Tapié の同僚 Jacques Droz 教授で、この人は、Mitteleuropa の思想およびカール＝レンナーの改革プランに対する興味のために、ドイツ史からオーストリア史に移った学者である。彼の著書では次の二つが注目されるが、ここでは特に後者を問題にする。

J. Droz, *Histoire de l'Autriche*, Paris 1963³.

J. Droz, *L'Europe Centrale. Évolution historique de l'idée de "Mitteleuropa"*, Paris 1960.

彼は、Tapié とは別の視点から出発する。周知のように、Mitteleuropa の概念と意義についてはこれまで多くの論議がなされてきたが、彼はオーストリア-ハンガリーを「中欧」の構成要素と考へる。ところで「中欧」は、一つの統一体として捉えられた場合、連邦的にしか形成されえないから、そこで彼の特別な関心は、連邦的思想の発展に向けられる。連邦的国家構成の理念は、ハプスブルク帝国内でも切実な研究の対象となった。そこ

14) Tapié は、1964年ウィーンの Belvedere 宮殿で開かれたシンポジウムでも、フランツ＝フェルディナントについてレポートし、この報告はその後1967年に、フランス近代史学会の機関誌 *Revue d'histoire moderne et contemporaine* に掲載されている。

では幾多の民族が一つの共通な支配権力のもとに生活し、なんら民族的基礎をもたない国家が存在するという緊急の課題があったために、この論議は实际的意義をもちえたのである。民族国家の構成原理として中央集権的統治形態が要求されるとすれば、多民族国家に適合するものは連邦的国家形態でなければならず、それは上位の法理念、文化的連繫、王朝的伝統などによって統合される。中央集権的な国家指導と諸民族の連邦主義的努力との間の不一致は、ハプスブルク帝国の決定的な問題であったが、オーストリア-ハンガリーがヨーロッパの国家体系の中で強国的地位を占めたために、同時にそれはヨーロッパ的意義をもつ問題でもあった。こうして、国内の国制問題が対抗する列強の帝国主義政策の中に引きこまれたために、ハプスブルク帝国の改革理念は、いろいろと論議されながらも自然の成熟を妨げられるという不幸な結果を生んだ。第一次大戦の前夜には「オーストリア王国の基礎をなしている古くからの共通性は、そこに住む人々にとってもヨーロッパの幸福にとっても必要であるという」深い一般的確信が支配しており、のちに加えられた、オーストリアは従属する「諸民族の牢獄」*Völkerkerker* であるという非難は、まだあげられておらず、むしろ「諸民族に永続的な平和と公正な正義を与えてきた超民族的君主国が破壊されたら、短期間のうちに混沌とアナーキーがやってくる」と考えられていた、と説かれる。

オーストリアではその行政が、イギリスにおける議会のように、国家の根幹をなしており、技術的には、これが諸課題の先頭に立っていた。スイスを別にすれば、オーストリアは諸民族の権利と利益がおそらく最も広範に代表された国家であり、ハプスブルク家が不満の思慮深い分配によってその諸身分を支配したという定式は、歴史的眞実とはほとんど一致しない。Droz は、まとまった民族国家よりも多民族国家の方がいっそう大きな道徳的権利をもつことを認め、この点をよく説明したものとして、Ignaz Seipel の“*Nation und Staat*”および“*Gedanken zur Reform der österreichischen Verfassung*” (1916ないし1917) をあげている。

要するに著者によれば、オーストリアは第一次大戦中に亡命者が宣伝したような諸民族の牢獄ではなく、1914年以前には、ハプスブルク家の支配の終末や王国の分裂をまじめに考えたものはなく、旧オーストリアに止めの一撃が加えられたのは、まさしく外部からであった。すなわち、ハプスブルク帝国の解消とそれに伴うドナウ地域の分裂は、内的必然性から生じたものではなく、亡命者の宣伝および戦争の諸事件の結果であった、というのが、本書の要旨である。

Tapié と Droz はフランスの定評ある歴史家であり、オーストリア科学アカデミーの通信会員でもあって、その発言は有力であるが、二人がこのような見解を述べていることは、注目に値する。

最後に、旧ハプスブルク帝国についてなおちがった考察の仕方もありうる例として、

Jean Rupp, *Lumière à l'est*, Paris 1969.

をあげよう。Rupp はモナコの司祭で、以前にはパリの助司祭をつとめた、きつすいのアルサス人である。彼は、フランス人がオーストリアについていかに無知であり、ドナウ王国の文明上の功績についていかに正しくない情報を与えられているかを嘆き、オーストリ

アの斯拉ヴ世界に及ぼした精神的・文化的な広範な影響を陳述することによって、旧オーストリア-ハンガリーのみならずこんにちのオーストリアもがいかに比類のない役割をはたしているかを、示そうとしている。本書はなんら政治的目的をもたず、歴史=神学的・宗教的な関心にもとづいて、教会の一般的活動に奉仕しようとするものであるが、フランスの書物で、オーストリアの文明上の功績にこのような賛辞を呈したものは、かつてなかった。

彼は、ウィーンの行政がさまざまな人々を結びつけたやり方のうちに天才的なものをみだし、最も人間的で、文化的・精神的に密度の高いベーメンとオーストリアが結びつけられているのは、有益なことだと述べている。しかしとりわけ注目されるのは、1867年のアウグライヒを大きな誤りであったとする多くの歴史家の見解とちがって、彼がむしろオーストリアとハンガリーの提携こそドナウ連邦の存立を可能にすると力説している点である。彼によれば、二重主義は芸術・知性・深遠さの人間の実現であり、それは奇跡をつくり出す力をもつ。すなわち二重主義は、ユーラシアの理念を確立する使命をもつマジャール人の世界を通じて、ヨーロッパの心をアジアに打ち明ける機会を与えたが、残念ながらそれには良心が欠けていた。とはいえ、政治家の宣言や、オーストリア-ハンガリーの世界に理解力をもたない歴史家の主張をうのみにするならば、大きな誤りを犯すことになる。さらに Rupp の視野の中では、ハプスブルク帝国の斯拉ヴ諸民族特に南斯拉ヴ人に、東方のギリシア正教との結合を求め全教会的な意味で活動する使命が、与えられている。

Rupp は政治的事情については十分な知識をもたず、その考察の仕方は当然 宗教的・精神的に強調されすぎているが、それにもかかわらず、過去から現在にわたるオーストリアの精神生活についてかなりの知識をもった一フランス人が、ハプスブルク帝国の精神的可能性とそのヨーロッパ的意義を、旧来の伝統的判断に煩わされずに正しく評価しようとしている点は、注目されよう。

V イタリア・西ドイツ・オーストリアの事情

次にその他の諸国を簡単にいちべつしよう。イタリアでも、第二次大戦後オーストリア史に対する関心はほとんど現われなかった。リソルジメントの研究はオーストリアの歴史にも重要な意味をもつが、イタリアの歴史家たちは、この問題もほとんど取り扱わなかった。一般に彼らは、民族問題や中欧史の他の方面に関心を向けずに、研究を狭義の自国史に集中したのである。しかしそのために、彼ら自身の歴史について数々の重要な文書が出版されたことは、オーストリアの政策に貴重な光をあてる結果になり、オーストリアを扱う外国の歴史家たちに大きな便宜を与えるはずであるが、ただイタリア以外の学者にはイタリア語を駆使するものが少ないので、それらはまだ大して利用されていないといわれる。それらのうち特に重要なものとしては、ローマの Istituto Storico Italiano per l' Età Moderna e Contemporanea の刊行にかかる *Fonti per la Storia d' Italia* シリーズの中の次の諸巻がある。

Le relazioni diplomatiche fra l' Austria e il Regno di Sardegna, a cura di Franco Valsecchi, 3rd ser., Vol. III: 4 dicembre 1849—30 dicembre 1852 (Rome 1963).

Le relazioni diplomatiche fra l' Austria e il Regno delle Due Sicilie, a cura di Ruggero Moscati, 3rd ser., Vol. II: 22 maggio 1859—19 febbraio 1861 (Rome 1964).

Le relazioni diplomatiche fra l' Austria e il Regno di Sardegna, a cura di Narciso Nada, 1st ser., Vol. I: 24 aprile 1814—17 luglio 1820 (Rome 1964).

しかし、オーストリア史そのものについて重要な仕事をしている二人の歴史家の名前を逸するわけにはゆかない。その一人は、民族問題のすぐれた専門家 Leo Viliani で、ハプスブルク帝国の民族問題にかんする彼の諸論文は、1946年以後西欧で書かれたもののうち、最も包括的なものといわれている。

L. Viliani, "Reflessioni sulla storia d' Ungheria", Il Ponte, Vol. XVI, No. 4-5 (1960), pp. 451-467.

L. Viliani, "La dissoluzione dell' Austria-Ungheria," Rivista Storica Italiana, Vol. LXXIII, No. 2 (1961), pp. 265-320; Vol. LXXIV, No. 1 (1962), pp. 52-92; Vol. LXXVI, No. 3 (1964), pp. 601-670.

L. Viliani, "La politica estera dei governi rivoluzionari ungheresi del 1918-19," *ibid.*, Vol. LXXVIII, No. 4 (1966), pp. 850-911.

L. Viliani, *La dissoluzione dell' Austria-Ungheria*, Milano 1966.

いま一人は Angelo Fillipuzzi で、彼は文書類の出版および特殊研究の発表を通じて、イタリアにおけるオーストリア支配の性格を再評価する必要性を説いており、その点で功績が大きい。しかし彼の仕事も、オーストリア以外ではほとんど知られていないといわれる。

A. Fillipuzzi, *Le relazioni diplomatiche fra l' Austria e il Regno di Sardegna e la guerra del 1848-49* —Fonti per la Storia d' Italia シリーズの Vol. LIII および LIV —(3rd ser., 2 vols., Rome 1961).

A. Fillipuzzi, *La pace di Milano 6 agosto 1849*, Rome, 1955.

A. Fillipuzzi, *La campagna del 1866 nei documenti militari austriaci. Le operazioni navali*, Padua 1966.

次に西ドイツをみよう。1940年代には、西ドイツの歴史家たちはこれまたオーストリア-ハンガリー史に大した興味をもたなかった。第二次大戦直後西ドイツ歴史学界では、もう一度西欧とのつながりを堅くしてドイツの過去を再評価しようとする努力が顕著で、とりわけビスマルク時代史の研究がさかんに行なわれた。この課題を追求する過程で、西ドイツの歴史家たちはナショナリズムの問題に——民族国家 nation-state の概念と関係をもつかぎりで——立ち向かい、このようなドイツ人の関心を反映して、少数民族問題を扱った書物や民族自決にかんする研究が現われた。これらは中欧史に対する一義的関心から生まれたものではないが、中欧の歴史と深い関係がある。

Erwin Viefhaus, *Die Minderheitenfrage und die Entstehung der Minderheitenschutzverträge auf der Pariser Friedenskonferenz 1919. Eine Studie zur Geschichte des Nationalitätenproblems im 19. und 20. Jahrhundert*, Würzburg 1960.

Paul Kluge, *Selbstbestimmung. Vom Weg einer Idee durch die Geschichte*, Göttingen

1963.

などがそれである。ナショナリズムの研究で西ドイツの歴史家が指導的地位を占めてきたことは、周知のとおりであり、Eugen Lemberg, Theodor Schieder, Reinhard Wittram, Hans Rothfels などが、注目すべき重要な成果を発表している。

E. Lemberg, *Geschichte des Nationalismus in Europa*, Stuttgart 1950.

E. Lemberg, *Nationalismus*, 2 Bde., Reinbeck bei Hamburg 1964.

T. Schieder, *Der Nationalstaat in Europa als historisches Phänomen*, Köln 1964.

R. Wittram, *Das Nationale als europäisches Problem. Beiträge zur Geschichte des Nationalitätenprinzips vornehmlich im 19. Jahrhundert*, Göttingen 1954.

H. Rothfels, *Die Nationalidee in westlicher und östlicher Sicht*, Köln 1956.

とりわけ一種の開明的保守主義とよばれる Schieder のアプローチは、19世紀の歴史的な力としてのナショナリズムを認識するにはなほだ有益であったといわれている。

ところでドイツの比較的若い世代の歴史家の中には、直接オーストリア-ハンガリー史そのものに目を向け、貴重な仕事をしている人々も現われている。その中には Schieder の門下も含まれており、特に Peter Burian と Hans Mommsen は、オーストリア史の分野で Schieder のアプローチを生かしている学者として、注目すべき存在である。

P. Burian, *Die Nationalitäten in "Cisleithanien" und das Wahlrecht der Märzrevolution 1848-49. Zur Problematik des Parlamentarismus im alten Österreich. Veröffentlichungen der Arbeitsgemeinschaft Ost, No. 2*, Graz 1962.

H. Mommsen, *Die Sozialdemokratie und die Nationalitätenfrage im habsburgischen Vielvölkerstaat, Vol. I: Das Ringen um die supranationale Integration der zisleithanischen Arbeiterbewegung 1867-1907. Veröffentlichungen der Arbeitsgemeinschaft für die Geschichte der Arbeiterbewegung in Österreich, No. 1*, Wien 1963.

東欧の諸問題にかんする1945年以後の西ドイツの歴史叙述と歴史研究を論ずる場合には、さまざまな東欧研究所 Osteuropa Institut の活動に触れないわけにはゆかない¹⁵⁾。東欧研究所の多くは政治的な理由で設立され、最初は政治的な目的をもっていたが、過去20年余の経過のうちに、それらの活動は変化し、最近10年ばかりの間に、大抵の研究所では、民族問題について、東欧史について、特に19世紀のオーストリア-ハンガリー帝国史について、客観的な、貴重な成果が生まれている。とりわけ Herder-Forschungsrat と Collegium Carolinum はりっぱな仕事をしており、後者は、ズデーテン-ドイツ人の組織から真に建設的な歴史研究センターに変貌したことが、注目される。

最後に、1946年以後のオーストリアの研究活動を概観しよう。オーストリア人は、第二次大戦後はじめて彼ら自身の歴史をもつことを発見したといつてよい。両大戦間の時期に——実際には1918年以前にも——現在のオーストリア共和国の地域出身の歴史家たちの

15) 西ドイツにある東欧研究所の一覧表は、週刊新聞 *Das Parlament* の増刊 *Aus Politik und Zeitgeschichte*, September 14, 1960, S. 602-607 にのっている。そのうち特に顕著なものは、Johann Gottfried Herder-Forschungsrat, Südost-Institut (München), Collegium Carolinum (München) である。

著作を支配していたのは、ハプスブルク帝国にかんする汎ゲルマン的解釈であった。しかしこの態度は1945年完全に変じ、戦後オーストリアの歴史家たちはもっぱら彼ら自身の歴史に全力を注ぎ、他の問題をほとんど顧みなくなった。オーストリアの大学で近代史の講座を占めている教授たちは——Friedrich Engel-Janosi を唯一の例外として、Hugo Hantsch, Hans Kramer, Heinrich Benedikt, Alexander Novotny, Karl Eder, Fritz Fellner らはいずれも——もっぱらオーストリア史と取り組み、その分野で最もすぐれた成果をあげてきたのである。

それにもかかわらず、オーストリア人が戦後彼ら自身の歴史の再評価をはじめたとき、必ずしも正しい出発をしたとはいえなかった。彼らは、1946年の現実的要請に応ずる形で自己の再検討をはじめたのではなく、むしろ1912年の見地から彼らの歴史を書きはじめたために、ハプスブルク帝国の歴史について依然若干の誤解がつきまとう結果になった。

かつてドイツ系オーストリア人は自己を全体国家と同一視する傾向があったが、ハプスブルク帝国史を扱う戦後のオーストリアの出版物も、このような同一視を多分に保存しており、他の諸民族自身の権利を認めることは困難な状態にある。彼らは他の諸民族の立場を十分理解できず¹⁶⁾、ハプスブルク帝国の歴史にはオーストリア-ドイツ人の中央集権主義的解釈だけが有効であると考え、マサリクやベネシュを反逆者にすぎないとする主張もしばしば現われている。旧ハプスブルク帝国の非ドイツ系継承諸国では、教科書の中で全ドナウ地域を自民族の歴史として叙述することはないが、オーストリアの教科書はいまなお、900年から1918年にいたる期間にハンガリー、ベーメン、ガリツィア、トランシルヴァニア、ティロールなどで起こったすべての事柄を「われわれの歴史」として叙述している。もっとも最近では、それに対する反省も芽ばえはじめている。

第二次大戦後オーストリアで出版された書物の数は非常に多く、ここで詳しく論ずることはできない。必要なビブリオグラフィ的情報は、Austrian History News Letter および Austrian History Yearbook をみれば得られる¹⁷⁾。後者の刊行を指導しているのは、アメリカ合衆国の中欧ないしハプスブルク帝国史研究の代表的な学者の一人 John Rath 教授であるが、この年報は、国際的基礎の上に——したがってオーストリアの学者の協力をも得て——オーストリア史のさまざまなテーマにかんする研究の題名をできるかぎり網羅し、そのあるものを取りあげて批評し、同時に研究論文をも掲載している¹⁸⁾。これは、ハプスブルク帝国史だけでなく1918年後の共和国の歴史をも含む、最も包括的な文献の情報源であって、中欧特にハプスブルク帝国の問題点について歴史家相互間の意志の疎通をはかる上に、重大な役割をはたしており、その功績は絶大である。

ここでは、戦後のオーストリアの研究について、二三の点を指摘するにとどめる。第一は、さまざまな委員会によって、または出版シリーズという形で、多くの重要な書物が刊行されてきたことである。次にその主要なものをあげておこう。

16) それには、オーストリア人が東欧の諸言語に精通していないことも、大きな関係があると思われる。

17) この年報については、拙稿「アメリカの二つの中欧研究誌について」北大法学論集18-3,1968参照。

18) たとえば1964年のものには、83の著書名、336の論文名、77のDissertation名、53の目下進行中の論題名がのせられ、関係学者数は175人にのぼっている。

- 1) Veröffentlichungen der Kommission für neuere Geschichte Österreichs (Graz
の Hermann Böhlau Verlag の刊行するシリーズ)
 Schicksalsjahre Österreichs 1908-1919. Das politische Tagebuch Josef Redlichs,
 hrsg. v. Fritz Fellner, 2 Bde. Vols: XXXIX および XL., 1953-54.
 Quellen und Studien zur Geschichte des Berliner Kongresses 1878, hrsg. v.
 Alexander Novotny, Vol. 1: Österreich, die Türkei und das Balkanproblem. Vol.
 XLIV, 1957.
 Aus dem Nachlass des Freiherrn Carl Friedrich Kübeck von Küban. Tagebücher,
 Briefe, Aktenstücke (1841-1855), hrsg. v. Friedrich Walter. Vol. XLV, 1960.
 Berthold Sutter, Die Badenischen Sprachverordnungen von 1897, 2 Bde. Vol.
 XLVI および XLVII, 1960-65.
 Die Friedensaktion der Meinlgruppe 1917-18, hrsg. v. Heinrich Benedikt. Vol.
 XLVIII, 1962.
 Friedrich Walter, Die österreichische Zentralverwaltung, 6 Bde. Vol. XXXV-
 XXXVI, XLII, XLIII および XLIX-L, 1950-64.
- 2) Wiener Historische Studien (Wien の Herold Verlag の出版シリーズ)
 Hugo Hantsch, Die Nationalitätenfrage im alten Österreich, No. 1, 1953.
 Hans Kramer, Die Italiener unter der österreichisch-ungarischen Monarchie.
 No. 2, 1954.
 Karl Eder, Liberalismus in Altösterreich. No. 3, 1955.
 Heinrich Benedikt, Die wirtschaftliche Entwicklung in der Franz-Joseph-Zeit.
 No. 4, 1958.
 Julius Miskolczy, Ungarn in der Habsburger Monarchie. No. 5, 1962.
 Denis Silagi, Jakobiner in der Habsburger-Monarchie. No. 6, 1962.
- 3) Österreich-Archiv (Wien の Verlag für Geschichte und Politik の出版シリーズ)
 Fritz Fellner, Der Dreibund. Europäische Diplomatie vor dem Ersten Weltkrieg,
 1960.
 Erika Weinzierl-Fischer, Die österreichischen Konkordate von 1855 und 1933,
 1960.
 Felix Czeike, Liberale, christlich-soziale und sozialdemokratische Kommunalpolitik
 1861-1934. Dargestellt am Beispiel der Gemeinde Wien, 1962.
 Hans Sturmberger, Der Weg zum Verfassungsstaat. Die politische Entwicklung
 in Oberösterreich von 1792-1861, 1962.
 Theodor Veiter, Die Italiener in der österreichisch-ungarischen Monarchie. Eine
 volkspolitische und nationalitätenrechtliche Studie, 1965.
 Helmut Rumpler, Das Völkermanifest Kaiser Karls vom 16. Oktober 1918.
 Letzter Versuch zur Rettung des Habsburgerreichs, 1966.
 Robert A. Kann, Die Sixtusaffäre und die geheimen Friedensverhandlungen
 Österreich-Ungarns im Ersten Weltkrieg, 1966.
- 4) Studien zur Geschichte der österreich-ungarischen Monarchie (Graz の Hermann

Böhlau Verlag のシリーズ)

Klaus Frommelt, Die Sprachenfrage im österreichischen Unterrichtswesen 1848-1859. No. 1, 1963.

Felix Höglinger, Ministerpräsident Heiwich Graf Clam-Martinic. No. 2, 1964.

Helmut Rumpler, Max Hussarek, Nationalitäten und Nationalitätenpolitik in Österreich im Sommer des Jahres 1918. No. 4, 1965.

5) Veröffentlichungen der Arbeitsgemeinschaft Ost. (Graz の Hermann Böhlau Verlag の出版シリーズ)

Otto Folberth, Der Prozess Stephan Ludwig Roth. Ein Kapitel Nationalitätengeschichte Südosteuropas im 19. Jahrhundert. No. 1, 1959.

Peter Burian, 前掲書。ドイツの項参照。

Richard G. Plaschka, Cattaro-Prag. Revolte und Revolution. Kriegsmarine und Herr Österreich-Ungarns im Feuer der Aufstandsbewegungen vom 1. Februar und 28. Oktober 1918. No. 3, 1963.

Robert A. Kann, Das Nationalitätenproblem der Habrburgermonarchie. Geschichte und Ideengehalt der nationalen Bestrebungen vom Vormärz bis zur Auflösung des Reiches. No. 4 および 5, 1964.

第二は、過去二十余年の間に、オーストリアの諸問題について多くの Dissertation (学位論文) が生まれていることである。その中には、史料について有益なヒントを与えたり実際に史料を示したりしている点に価値があり、さらに進んだ研究への門戸を開くにとどまっているものもあるが、オーストリア史に実質的に貢献している貴重な研究も、少数ながら存在する。それらはいずれも出版される価値のあるもので、そのいくつか——たとえば Helmut Rumpler のフッサレーク研究 (上掲) や Friedrich Gottas によるハンガリーのプロテスタント問題の研究

Gottas, Die Frage der Protestanten im Ungarn in der Ära des Neoabsolutismus. Das ungarische Protestantenpatent vom 1. September 1859. Buchreihe der Südostdeutschen Historischen Kommission, Vol. XIV, München 1965.

など——はすでに刊行されているが、ハプスブルク帝国の民族問題を取り扱った、同様に価値の高い他の Dissertation 類は、財政的に出版助成金の支給が困難なために、なお未刊のままになっている由である。オーストリアの Dissertation の特徴としては、ドイツ＝オーストリア的観点が強調されていることと、伝記的性質の研究の多いことが、あげられる。

第三に、オーストリア史の研究が各方面でかなりの進歩をとげたところから、それらを総括しようとする学問的な大計画が企てられていることを、付記しておきたい。この計画はすでに数年前オーストリアの文部省で話題になり、今日まで引続き文部省の支持をうけてきたもので、専門的権威者たちの国際的協力を得て、数巻のオーストリア-ハンガリー帝国史をつくらうとするものである。オーストリア科学アカデミーにそのための委員会が設けられ、その努力によって、すでに 10 カ国 60 人以上の学者が協力を表明しているとい

われる。こういう形で、ともかくも数世紀間諸民族を結びつける役割をはたしてきたハプスブルク帝国の全体像が、できるだけ客観的に、怨恨や偏見にとらわれずにつくりあげられるのは、望ましいことであり、期待がかけられる。

VI む す び

以上西ヨーロッパのハプスブルク帝国史研究の動向を一通り概観してきたが、最後にもう一度全体を回顧しながら、今後中欧史の研究を発展させてゆく上でこころすべき点を、多少考えてみたい。

1945年後の——特に最近の——主要な傾向のうち、まず第一に注目されるのは、「諸民族の牢獄」といった古い観念がのりこえられ、ドナウ帝国の民族問題が偏見なく取り扱われるようになったことである。これは、ハプスブルク帝国解体後すでに50年以上たって、激情的なナショナリズムに根ざす自民族中心のはげしい論争的主張が次第に影をひそめ、帝国内諸民族のナショナリズムがそれ自身完全な歴史的考察の対象になりきり、その諸前提や諸条件が冷静に科学的に事実即して検討されるようになったことを示している。オーストリアの内部でも、ドナウ王国の解体とパリ講和条約について従来この国に拡がっていた自国本位のステロ版的な考え方には、鋭い批判と反省が現われはじめている。このような傾向はまことに望ましいことであり、ハプスブルク帝国史の学問的な研究の前提がようやく固まった感じがする。

第二に、従来ハプスブルク帝国史の研究では、求心的な力と遠心的な力の対立といったシェーマを基礎において、帝国を個々の構成民族に分解し、各民族をそれぞれ一つの単位として考察するというやり方が、基準になっていたが、1950年の中葉以後はむしろハプスブルク帝国全体という観念が強く打ち出され、その諸民族統合的な役割が重視され、帝国全体の視点から個々の民族をみなおす傾向が、はっきり現われている。これは第一の点とも関連しているが、その背後には、最近のヨーロッパ統合という問題意識がひかえているように思われる。多民族国家ハプスブルク帝国の問題点の立ちいった研究から、超民族的な組織の可能性と限界について重要な示唆が得られるであろうという期待が、このような考察方法を生み出しているのではなからうか。たしかにこのような視点からのドナウ帝国史研究は、全ヨーロッパ的協調の精神的諸前提をつくる上の、貴重な予備作業となるにちがいない。

第三に、従来ハプスブルク帝国の民族問題の研究は、二重主義か連邦主義かといった国制上の問題、言語問題とその影響、ないし顕著な人物の役割といった点に重点がおかれ、社会経済的な方法はほとんど採用されなかった。しかし最近ようやくこうした視角から民族問題への鋭いアプローチがなされはじめており、オーストリアで二人の学者がこのアプローチの有効性を示しているのが注目される。その一つは、自由派とキリスト教社会党の時期のウィーンにかんする Felix Czeike の研究であり、いま一つは、上オーストリア州の立憲的發展についての Hans Sturmberger の仕事（いずれも前掲）である。ハプスブルク帝国の民族問題を含む基本的な諸問題について解答を得るためには、ぜひともこうした新しい研究方法による必要があり、社会経済史の研究を他の研究分野と結びつける努力

は、今後ますます要求されよう。この点では東欧共産圏の継承諸国の方が進んでおり、最近数年間にさまざまな歴史家が社会経済的な研究方法を使用して、かなりの成果をあげている¹⁹⁾。アメリカでも、最近こうした研究方法が影響を及ぼしはじめている。

以上三点のうち、第一と第三は、われわれが今後ハプスブルク帝国史の研究を進めて行く上に継承してゆかねばならぬ点であるが、第二についてはなお検討の余地が残されている。全体国家の観点が打ち出され、その諸民族統合的機能が重視されるに至ったことは、たしかに一つの前進であるが、しかしそのみを強調することは、やはり一面的といわざるをえない。ハプスブルク帝国は諸民族の完全に好ましい連合だったのではなく、ヨーロッパの至るところで攻撃をうけた旧式な政治＝社会組織を代表していたのであって、帝国の滅亡は、深刻化していた国内の諸問題が第一次大戦の4年間に決定的なものになり、内部からの革命的爆発と外からの圧力とが結びついておこったもので、政治的変革を通じての旧体制批判という意味をもっていたことを忘れてはならない。それゆえハプスブルク帝国の再検討にあたっては、諸構成要素の分解的な役割と中欧に秩序を与える上で全体国家のはたした役割とを抽象的・平面的に羅列するのではなく、それぞれの時点について歴史的に正しく評価する配慮が必要であり、そのためには、個々の民族単位に考察を進めることも依然さけられないであろう。雪どけとともに鉄のカーテンが取り除かれたことによって、ウィーンの中央文書局の文書が利用できる唯一の史料ではなくなり、東欧継承諸国の史料もかなり利用できるようになったので、研究者は今後それらを十分活用して、ハプスブルク帝国についていっそう深い、バランスのとれた全体像をつくりあげることが望まれる。

それだけではない。すでに指摘されているように、古い一本石的な民族の概念は、いっそう近接して考察すれば解体してしまい、学問的研究の作業には十分役立たぬ道具であることが判明する場合も少なくない。その場合には、民族を超えた階級的視点を導入することも必要になるし、また19世紀末から20世紀にかけてのいわゆる大衆社会への移行と民族問題との関係を明らかにする作業も要求されよう。さらにハプスブルク帝国の治下で解決されず帝国の解体によってもなお解決されなかった諸問題が、第二次大戦後に出現した東欧共産圏の社会主義体制下で、現在どの程度まで、またどんな形で解決されているかといった視点も、当然取りいれられなくてはならない。ドナウ帝国の民族問題とアジアの新興諸国の民族的問題性の比較も、われわれ日本人には切実な関心をよぶテーマである²⁰⁾。要するに今後のハプスブルク帝国史研究は、こうした問題意識や視座をふまえながら、新しい研究方法を大幅に取り入れ、諸民族のナショナリズムの経済的・社会的・文化的・宗教的な諸前提、諸条件を事実即して冷静に検討する一方、全体国家の積極的・統合的な役割の性格と限界を確実に究明してゆくことに帰着するのではなかろうか。

このような仕方ではハプスブルク帝国史の研究が進められるならば、それは必然的に、単

19) ただそこでは、この方法にイデオロギー性が久しくつきまとっていたが、最近ではいわゆる東欧の自由化と関連して、この点も大きく変化している。東欧共産圏の研究動向については、別稿で他日検討する予定である。

20) 老朽化したハプスブルク帝国が、その矛盾にみちた存在を維持するために、他の列強——特にドイツ——にどのように依存しなければならなかったか、他の列強はこのハプスブルク帝国をどううけとめたかといった視点も、今後さらに具体的な裏づけをもって深められなくてはならない。

なるヨーロッパ的視野をこえて、こんにちの世界における諸民族の共同生活のあり方の探求と関係をもつことになる。数年前（1966）アメリカ合衆国のインディアナ大学で行なわれた、19世紀のハプスブルク帝国の民族問題にかんするシンポジウムで、Whiteside 教授は「さまざまな経済的・文化的発展にある諸民族の共存こそ、こんにち世界的な問題になっている」と述べ、また Wandruszka 教授は「全世界はこんにち一つの多民族国家なのだ」と語ったが、このような問題意識に立つとき、ハプスブルク帝国の民族問題にかんする研究からは、たしかに多くの示唆が期待されるし、ここにこの研究の最大の現代的意義があるといえよう。（1971. 9. 8）

〔附記〕本稿は昭和46年度文部省科学研究費による研究成果の一部である。